

人と地球と、いっしょに。

KOAの理想

私たちのめざす“ものづくり”

- 一、人間性を大切にすること
- 一、自然環境に配慮すること
- 一、暮らしを豊かにすること

そんなKOAの考え方と
新たな実験の数々をご紹介します。

●KOAと自動織機

明治時代の末から約80年間も稼働しつづけている現役の自動織機があります。わずか一つのモーターで、20数台のシンプルな機械がムダなく見事に動き、この機巧(からくり)でしかつくれない高付加価値の製品を生みだす。私たちは、このような生産の設備や方法にたくさん学ぶべきことがある、と考えています。

大きいだけじゃダメ。



高度成長と呼ばれた時期は、世の中に、無尽蔵の需要があるように思えました。モノをつくれればつるほど、それらは確実に売れたのです。ところが、時代が安定成長へと移り変わると、見込み生産を続ける大量生産方式では、在庫や管理などの無駄が目立つようになりました。けれど、巨額の設備投資をしているから、生産設備を休ませるわけにもいきません。さらに、大きな機械は人間との対話を拒絶して、働く人々からも、のつくりの姿態をも奪い去ってしまうのではないのでしょうか。



大きな「生産設備」から
手づくりの生産設備「機巧」へ。
KOAの新しい発想は、
人間性の回復をめざします。

仮に、一日6万個製造できる大きな生産設備で、100個だけつくって欲しいという受注があったとします。その日、その機械がフル稼働すると5万9千900個の在庫と時間のムダが生まれてしまうことでしょう。商品ニーズが多様化している現代、KOAはシンプルな生産設備を考えています。小さくても個性的な手づくりの機械。私たちは「機巧（からくり）」と呼んでいます。これなら100個の受注でも

一人の担当者が「ものづくり」の実感を味わいながら生産できます。しかも完成までの時間が短縮でき、お客様の要望が多様であってもすぐ対応できます。万一故障しても、仕組みが単純ですから、簡単に直せます。そう、水車を思い浮かべてください。これなら、トンカチひとつで修理できますね。今、KOAは人間に近い手づくりの生産設備としての「機巧（からくり）」をつくりたい、と思っています。

ゴミをつかってゴメン。



便利さと外見だけを気にして、野菜も豆腐も弁当も、どんなものでも徹底的に包装してしまう過剰包装。燃えると有害ガスが発生するプラスチック製品。故障するとすぐに捨てられてしまう電化製品。使い捨てがお洒落と考え、モノを粗末にする風潮とあいまって、人間は大量生産とともに、大地に還元できない大量のゴミを排出しています。いま、ゴミ処理は深刻な社会問題。ゴミは人類に逆襲しようとしているのです。



**ムダなものをつくらない。
ゴミはつくらない。
KOAは循環を考えた
"ものづくり"に挑んでいます。**

ゴミの増加は、 unnecessaryモノが世の中に
沢山溢れていることの証し。「大量生産と
大量消費」を常識とする考え方が、ゴミ
を生み出す背景にはあります。そこで、
KOAは考えました。必要とされている
モノを、必要な量だけ必要な時につくろ
う、と。すると、余分な在庫を抱える必要
がなくなり、生産工程から数々のムダが

ます。また、「ものづくり」の機械も、大地
に還元できる木やガラス、鉄などの素材
にすれば、それだけ環境に負担を与えな
いですみます。製品そのものもリサイク
ルできるようにしたり……人間の知恵を
絞れば、まだまだ、やれることはたくさ
んありそうです。KOAは、すでにフロ
ンガスの全廃を実現。そして今、より環
境にやさしいモノの循環を考えています。

木や風の声に、耳を傾けよう。



高層ビルは、人間の手掛けた無機質な造形物であり、大樹は歲月が練り上げた自然の造形美です。どちらも天に向かって伸びていますが、片やベルの塔のように天に挑戦する傲慢さの象徴であり、片や樹齢を重ねた木には昔か、神が宿ると信じられてきました。今までの都市文明は、建造物の質と量をしながら、権力を誇示し、テクノロジーを競って来たのではないのでしょうか。静を重ねた大樹からのメッセージは、ぜひ耳を傾けようと思わせてくれます。



工房「匠の里」の周りを、豊かな雑木林に。私たちに、森から学ぶべきことがたくさんあります。

鎮守の森では、しばしば見上げんばかりの大樹に出会うことがあります。人間よりも遙かに長生きして、その土地の変遷を見まもってきた木の前に立つと、誰もが畏怖の感情を覚えずにはられません。けれど、現代人は慌ただしい生活サイクルの中で、そんな木との対話を持つ余裕さえなくしつつあるのではないのでしょうか。KOAは、

自然から学ぶべきことが、もっと、たくさんあるはずだ、と感じています。そして、「森をつくろう」という遠大な計画が誕生。すでにKOAの工房「匠の里」のまわりには約1万5千本の雑木を私たちの手で植樹しました。森の緑の中で働き、毎日の暮らしの中でも、自然と対話できる心のゆとりを持ちたい。それが、私たちの願いです。

A wooden mechanical doll, known as a 'Karakuri Ningyo', is the central focus of the image. It is a complex piece of woodwork with a human-like face and torso, but its body is hollowed out to reveal intricate gears, belts, and mechanical parts. The doll is standing on a wooden workbench in a workshop setting, with various tools and wooden pieces scattered around. The lighting is warm and focused on the doll, highlighting its craftsmanship. The background shows a blurred workshop environment with shelves and tools.

工房 (Workshop)

KOAは小規模の経営組織をつくり、
それをワークショップと呼んでいます。
匠の工房のような雰囲気の中、
みんながいそいそと働ける職場をめざします。

●KOAとからくり人形

からくり人形には、精妙な仕掛けさまざまな工夫が施されています。しかも、その部品は歯車ひとつとっても木製の手づくり品であることに驚かされます。KOAは、「ものづくり」の発想にもからくり人形の知恵が生かせるのではないかと考えています。

思いやりって、むづかしい。



お茶を飲む。ただ、それだけの行為を、日本人は茶道にまで高めました。神の精神をも取り入れて、おもてなしの心、礼儀、作法などひじょうに精神性の高い文化に磨きあげたのです。それが日常の場面にも思いつき「まずはお茶でも」と、人と人のおつきあいの潤滑油となっています。それに反して、自動販売機のお茶は、のどを満足させることはできても、人との交わりにも心も満足させることはできません。



**お客様の顔を見てから、
つくりはじめる。
できたてほかほかの
製品を納める。
それがKOA方式です。**

KOAのワークショップは、人と人との関わりを“ものづくり”の基本に据えています。この製品は、どんなお客様が、いつ、どのように使うのか。それをいつも意識しながら、「お客様の顔が見える“ものづくり”」を心がけています。生産者が直接お客様のご注文を受け止めて、“ものづくり”を手掛け、そして完成品として納める。いわば、“ほかほか弁当”の

お店のようなシステム。より早く、より質の高い製品でお客様に喜んでいただけるよう、いつもワークショップは情熱を傾けています。また、お客様の喜びが直接伝われば、生産者としてのやりがいも大きくなるはず。今日もKOAのワークショップでは、お客様とあたたかい信頼関係を育みながら、心の通いあう“ものづくり”をめざしています。

もっと、元気をだそう。



文明といふ名のカタダ汚染がどんどん広まり、今の世の中、「E」が、
おかしい」とたれもが気づきはじめています。健康のためには、自動車
に乗るより歩いたほうがいい。食べるなら、農薬を使った野菜より有機
農法のほうがいい。と、頭の中では理解していても、この加速しつづけ
る文明の歯車「もはやストップをかけられませんか。文明と自然
の調和をめざして、人類は、今、その叡智を試されようとしています。

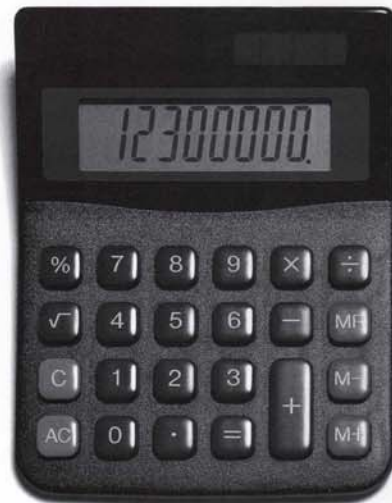


**ひとりひとりが五感を磨くこと。
それは“ものづくり”の質を高め、
仕事に充実感と喜びを
もたらすことでしょう。**

テクノロジーの発達は、私たちに大きな便
利さをもたらしました。自動車は人の足に
なり、テレビは人の目となり、産業界にお
いては、生産のプロセスで高度なロボット
が人間の手作業を代替するようになってい
ます。けれど、それらの便利さと引き換え
に、現代人はじぶんの身体を動かして「感
じる」ことを忘れつつあるのではないで
しょうか。KOAは、“ものづくり”の現場で、

五感を尊重したい、と考えています。自ら
の手を使って、生産設備「機巧(からくり)」
をつくり、それを使いこなす。これは匠の
世界に通じる発想です。それぞれのワーク
ショップで、それぞれの感性を磨きながら、
より質の高い製品をつくる。人間にしか味
わえない創造の喜びが感じられる。そんな
“ものづくり”の環境を整えるために、す
でにKOAは第一歩を踏みだしています。

じぶんの技を磨こう。



「電卓」が出現して、そろばんを利用する人はめっきり少なくなりました。でも、この小さな計算機を手に入れて、現代人の計算能力は衰えていないでしょうか。いつもワープロを使っている人が漢字の書き方を忘れてしまうように、なぜか、人は機械に頼りすぎると、じぶん本来の能力を磨く努力を怠ってしまうようです。今、あなたは職場でコンピュータを使いこなしていますか、それとも使われていますか。



「自動機」ではなく、
にんべんのつく「自働機」へ。
KOAの“ものづくり”は、
いつも人間が中心です。

プロのメンテナンスが必要な自動機ではなく、自らの手で修理できる「自働機」を使いたい。これは、ちょっと考えると産業革命以降のテクノロジーの発展に逆行するかのようには思えます。では、このような前近代的な「自働機」が現実稼働しはじめると、ほんとうに製造業の生産性は阻害されるのでしょうか。KOAはノーと言います。むしろ、今までの大

量生産システムから生まれたムダな部分をクローズアップしてくれるでしょう。すでにKOAの数あるワークショップの中では、大型生産設備への依存を緩めて、人間の技や能力を重視した実験的な試みがいくつか行われています。このチャレンジが時代の新たなニーズに応える種子となり、やがて大きな収穫をもたらしてくれる、とKOAは期待しています。

KOA収穫祭

私たちは、
遊びがともなう“ものづくり”を大切にします。

KOAの誕生は、1929年の恐慌によって養蚕が壊滅状態にあった時代。「伊那谷に太陽を」というスローガンのもと、農業が中心だった伊那谷に創業されました。当時の「農工一体論」の理念は、現代のKOAにもカタチを変えて脈々と息づいています。そして今、新しい時代にふさわしい「ものづくり」の理想に向けて動きはじめています。私たちは、まずムダを省き効率化されたワークショップによって作業時間の短縮をめざしています。その余剰時間を上手に使って、人間が生きて暮らしていくために必要なあらゆる「ものづくり」に挑みたいと考えています。例えば、畑を耕したり、家畜を飼ったり、椅子やテーブルをつくらせたり、お皿やお椀の陶器を焼いたり、そして自分の手で住まいをつくらせたり…。ワークショップで働く人たちが、どのような「ものづくり」を選ぶかは、個人の趣味や関心のあり方によって千人十色でしょう。KOAは、今までの「工」の既成概念を超えて、「ものづくり」の選択枝を数多く用意したい、と思っています。環境にやさしく、人間らしい「ものづくり」には、「工」であれ「農」であれ、心をこめてつくる遊びや、完成したときの収穫の感動があります。私たちは、そんな遊びにあふれた一日一日を大切にしながら、未来へ向かって進んでいます。